

Title	ヒンディー語図書出版の現況 : ヒンディー語出版界の特色
Author(s)	ヴァルマー, ダヤーナンド
Citation	印度民俗研究. 1976, 3, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50343
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ヒンディー語図書出版の現況

— ヒンディー語出版界の特色 —

ダヤーナンド・ヴァルマー

ある雑誌編集者と話した際、ヒンディー語による出版物の評判に話題が及んだことがあった。この編集者曰く、20万部にも上るほど版を重ねているような本が一般大衆の読書態度を穢している。すべからくこの種の本を取締るべきだ。

これに対して私は、人を犯罪に駆りたてたり道義の頹廃を助長するようなものであれば取締りの対象とされるべきだが、その根拠を本の中味ではなく発行部数にするというのなら納得しかねると言ったのだった。

発行部数を取締りの根拠にする理由をこの編集者はこう述べた。「こうした本は大々的な宣伝機関に乗って大衆を圧倒してゆくものだから高尚な文学が抑えつけられてしまう。このような（低俗な本）が出なければ、純文学作品が日の目を見る機会にもっと恵まれるはずである。」

しからは、『アクバル・ビールバル・ヴィノード』¹、『アールハー』²、『サーランガー・サダーヴリジ』³、『トーター・マイナー』⁴、『ナナディー・ボージャイヤー』⁵など農村に愛読者を持つ書物をどう考えるおつもりか。これらはいずれもその売上げ部数は毎年数十万冊にも上るのでありますぞ。

編集者にはこの事実は信じられない様子だった。

出版業界のあらゆる部門の内部事情に精通していなければどこかの機関の大量購入図書（Bulk Purchase）に掲載もされず、また新聞・雑誌等で宣伝広告されないにもかかわらず年間数十万部も売れる本があるという実情をだれも信じる気にはなれまい。

民間伝承文学及び大衆文学の重要性を無視しては純文学のそれは語れない。高級な文学の読者も作家も民間伝承の文学を扱って所にしてそれぞれの今日に到達し得たのである。

幼少の頃祖母や母親の話してくれる数々の物語に誰しも心を躍らせるものであるが、これをきっかけに文学の世界に足を踏み入れる人たちの中には『ソーラティー・ブラジャーバル』⁶とか『シンハーサン・バツティーシー』⁷とかの世界にとどまって生涯を過ごすものもいる。また中には三文小説や大衆雑誌をもって終着点とする人たちもいる。そして一段と知識欲に燃える人たちはこれらの通俗的な作品をしばしの足休めの場と見なして深い思索へといさなう作品にまで歩を進めるのである。

文学、すなわち真の文学の読者と称せられる高級な文学の数少ない読者は、民間伝承文学、あ

るいは、表層の文学の読者と言われる幅広い読者層の中から濾漉されて現われるものである。その根底をなす読者層が軽視されるとなると筆者の脳裡にはプーナとナーグブルで開催された会合での講演が思い起こされることになる。

全インドヒンディー出版社連盟⁸のプーナ大会の席上、R・M・シンデー氏⁹はこう語った。「ヒンディー語普及に力のあつたヒンディー語普及団体に御礼の言葉を申し上げたいのであります。なんという団体かと申しますれば「ヒンディー語映画」¹⁰というわけであります。」また、ナーグブルでの世界ヒンディー語大会¹¹の席上、フィジーとかモーリシャス等の国々に住むインド系の代表たちは、それぞれの国でのヒンディー語の普及には『ラーマーヤナ』¹²とか『ハヌマーン・チャーリーサー』¹³、あるいはボージュブリー民謡¹⁴に負うところが大きいことを繰り返し述べたのであつた。

民衆嗜好を洗練するという名目で民衆の嗜好する文学を蔑視するような文学者たちは恰もピラミッドの巨大な基底部を無用の長物と見なしながらその尖つたてつぺんを保存できるものと考えているようなものである。

ヒンディー語で書かれた本は売れないとか、ヒンディー語を話す人たちは読書の関心が低いとか立き言をいう人たちがいるが、筆者はどうもこの意見には賛成しかねる。ヒンディー語を話す人たちが書物を求める気持はどの国の人たちにもどの地方の人たちにも劣っていない。どの程度の知的水準の人が多いかによってそれぞれの地域で所望される書物の程度が決まってくるわけである。八割の人たちが農村に住んでいるのは何ともし難いのだ。現代科学に縁のない農民は、民間伝承に愛着をもっている。それらは昔話や伝説、詩あるいはノータンキー劇¹⁵、ワールティク¹⁶といった色々な形態で伝えられてきている。

農村に住む人たち程度の知的水準の都会の人たちも知識は比較的豊富である。従つて伝統的な『ヒール・ラーンジャー』¹⁷とか『ハーティームターイー』¹⁸のようむ恋愛譚や伝奇小説の登場人物を近代的な道具だてのもとに見て楽しんでいる。伝奇小説や推理小説が一般受けする秘密はここにあるのである。これらの中には出来不出来もあるが、数十万部もの版を重ねるような本なら間違いなく母親が娘の前でまた父親が息子の前で広げて読んでも恥ずかしくないような小説である。表紙にさらにカバーをつけて読まなければならないような作品はどうしても大量に出ることはない。

大衆文学の範疇に入る著作の著作権は著者もしくは出版者が握っているなのでその売上げ部数を調べるのは難しいことではない。民間伝承文学は概して著作権には関係がないので、一般に親しまれているものはいくつもの出版社から出版されている。しかしその売上げの総部数を調べるのは比較的困難である。それらの推定売上げ部数と文学界で取り沙汰される作品の売上げ部数と比べてみると驚くべき事実が多数明らかにされるのである。

トゥルシーダースの『ラーマーヤナ』は宗教書として、民間伝承の物語として、また古典として三つもの範疇に入れられる。このうち古典としての売上げ高は容易に他と区別できる。『ラームシャラーカー・ブラシュナーワリー』¹⁹及び後世に付加された物語²⁰を折り込んだ『ラーマーヤナ』は民間伝承文学及び宗教文学の範疇に入る。ナーガリー・プラチャーリニー・サバー²¹とかヒン

ドゥスターニー・アカデミー²²といった3, 4の出版社から出ている立派な校訂の『ラーマーヤナ』はそれら全部の売上げを合わせても年間2万5千部に満たないであろう。一方、30社ほどの民間伝承文学を専門にしている出版社がこの『ラーマーヤナ物語』の「完」「抄」様々な版を多数出している。これらの版の売上げ部数はそれぞれ年間平均2万5千部に達している。これらを総計した数字にヒンディー語を愛好する人はだれしも満悦するであろう。その上、この数字は年々増加してきているのである。

文学的価値を認められている大衆文学の作品にデーヴァキー・ナンダン・カトリー²³の著作『チャンドラカーンター』²⁴がある。この本の推定売上げ部数は年間一万部である。『ジャヤドラタ・ヴァダ』²⁵、『クルクシェートラ』²⁶、『ガバン』²⁷、『カーマヤニー』²⁸などの売り上げは『チャンドラ・カーンター』の数倍にも上るが、それはこれらの本が学校の教科書に指定されているという背景による。教科書の指定からはずされた場合、これらは『ナトラレーカー』²⁹、『グナーホーン・カー・デーワター』³⁰、『ナディー・ケー・ドゥヴィープ』³¹、『ティヤグ・パトル』³²ほどには売れぬだろう。

他方、民間伝承詩の一つである『アールハー』の武勇伝は全国で15余りの出版社が出しているが、どの版の言葉もそれぞれ他と異なっている。52の合戦のうち「インドラハラナ」、すなわち、「バラクブカーレの合戦の巻」³³に一番人気がある。この巻の各社の売上げを総計すれば年間5万部に達する。そのほか、若干の巻は2万5千部ほど売れる。残りの巻はそれぞれ2万5千部から5千部ほど売れている。

ヒンディー語でポケット・ブックがお目見えする以前、つまり今から20年ほど前まではどんな小説も年に5千部売れば大成功と考えられていたのだが、今日では、ポケット版で1万5千部刷るのは極く普通のこととなっている。6桁の数字を誇る作家はグルシャン・ナンダー³⁴ただ一人である。彼に次ぐ作家として7万~7万5千部を出せるラーズヴァンシュ³⁵がいる。この二人の後に続く作家を人気順に挙げるならば、サミール³⁵、ロークダルシー³⁵、ラーヌー³⁵、オーム・プラカーシュ・シャルマー³⁶といったことになろう。2万5千~3万部に迫る作家は他にも十指に余るほどいる。

純文学と大衆文学の両分野で等しく名声を得ている作家にシヴァーニー³⁷、グルダット³⁸、チャートルセーシ³⁹がいる。これらの作家の作品がポケット版で新しく出れば年間2万~3万部は売れ、単行本もやはり2~3千部はかたい。

次に政府の大量購入の図書目録に掲載されなくてもまた教科書に指定されなくても売れるフィクションの作家には次の人たちがいる。——ヴィマル・ミトラ⁴⁰、バグワティーチャラン・ヴァルマー⁴¹、ニルマル・ヴァルマー⁴⁶、ブレイムチャンド⁴²、シャラット⁴³。これに続くグループにクリシャン・チャンドル⁴⁴、アッギューエ⁴¹、ジャイネンドラ⁴¹、アムリター⁴⁵、カムレーシュワル⁴⁶、ナーガル⁴⁷、ヤーダヴ⁴⁶、ラーケーシュ⁴⁶、ヤシュパール⁴¹、イラーチャンドラ⁴¹、ジョシー⁴¹、アシュク⁴¹等が名を連ねている。これらの作家の作品の売上げ部数は出版社の腕次第で5百~2千部といったところである。

演劇の分野ではノータンキー劇と純文学的な舞台演劇とでは比較の対象にもならない。ラーム

リーラー⁴⁸用には大小様々の構成の幾十種もの版が出ている。北インドで最高の売上げを誇っているのはヤシユワント・シンハ・ヴァルマー⁴⁹の『アールヤ・サンギート・ラーマヤナ』である。15ルピーもするこの『ラーマヤナ』が年間1万部は出る。法に触れるようなことを平気でやってのけるある出版社の主人がすでにこれの海賊版を出している。1ルピーでラーマ劇を堪能させてくれる小冊子も十種類ほど出ている。クマーオニー⁵⁰とかガルワリー⁵¹あるいはアワディー⁵²等といった幾つかの地方語で出ているラーマ劇は今数えたものとは別である。購読する人たちのうちラーマ劇を実際に演じる人は少なく、読んで楽しむ人のほうが多い。

ノータンキー劇ではビカーリー・タークル派⁵³のものがヒンディー語圏の一番東の地方を支配しているのに対し、シュリー・クリシュナ・パハルワーン⁵⁴やナッター・ラーム・シャルマー・ゴール⁵⁵派はヒンディー語圏の中東部及びブラジ語⁵⁶地方で人気がある。北部州(ウツタル・プラデーシュ)の西部ではチャンドラバートとバルワント⁵⁷が幅をきかせており、ハリヤーナー州ではラクニー・チャンド、それにマーンゲル派⁵⁸のラーガニー⁵⁹がかなり売れている。ヒンディー語圏最東部地方⁶⁰では『ジャーリム・シン・ナータク』、中東部では『パティバクティ』、『ムハツパット・キー・プトリー』⁶¹、ブラジ語圏では『アマル・シン・ラータール』や『インダルハラン』⁶²が最高の売れ行きを示しており、それぞれ年間1万部は出ている。

パールシー劇団⁶³の演劇の時代はもはや終わった。当時の台本が欲しい人もアーガーハシユラ・カシミーリー⁶⁴の全作品を手に入れようと思っても入手不可能である。出版社が二、三点出したことがあったが、売れなかつたのである。ラーデシヤーム・バレリー⁶⁴の作になる戯曲は二十篇にもものぼるが、そのうち『ヴィール・アビマニユ』、『シュラヴァナ・クマール』、『クリシュナ・アヴァタール』⁶⁵の好調な売れ行きに海賊出版社の連中は口から涎を流しているわけである。

ラメーシュ・メーフター⁶⁶、ジャグディーシュ・シャルマー⁶⁷、チラン・ジート、ギヤーンデーヴァ・アグニホートリー、レーワティー・サラン・シャルマー⁶⁸等は今日の問題をテーマに詩や歌を交えず戯曲を書いている。これらが上演される場所も幾つかの都会に限られているので売上げも限定されている。

戯曲に関して一つ興味深いことがある。上に挙げた本が売れる季節は ラームリーラーの季節と一致することである。このような雰囲気の中で幕間劇の形で他の戯曲も同時に上演されているというわけなのだ。ブラサード⁶⁹、ジャグディーシュ・マートウル⁷⁰、モーハン・ラーケーシュ、ビシユヌ・ブラバーカル⁷¹、アシユクの戯曲は、概ね教科書に指定されているので売れ行きがよい。実験劇団⁷²は新しい試みをしてはいるがそれが売上げに特に影響を及ぼすほどではない。それらよりもよく売れるものにテンドゥルカル⁷³の作品がある。

詩——教科書に指定されているか、詩会で嘆声を浴びるような詩人の作品が売れるのである。以前詩会でバッチャン⁷⁴、ニラジ、バイラーギー⁷⁵、ヴィヤース⁷⁶が得ていた地位を今ではカーカー・ハートラシー⁷⁷が独り占めしている。

評論及び研究論文の項目に載るものがヒンディー語の出版目録の中では一番多い。図書館がこれらの本を買い入れるので出版社は発行部数千部の内年に250部ほどの売れ行きを見込んで刷る。

残部は本の漬物というわけで店や倉庫を飾り立てるのに一役かう。値段は5年間に半分売れば少なくとも原価は取り戻せる勘定で定められる。ナゲンドラ博士⁷⁸とかハッサーリーブラサード・ドゥヴィヴェディ先生⁷⁹のような著名な学者の著作は再版も出る。

随筆はラームチャンドラ・シュクル⁸⁰のものであれば大学の上級学年の学生が試験勉強のために買い求めるが、他はニバンド（随筆）の前にラリット（Lalit）⁸¹という形容詞をつけねばならない。そうした上でもなおかつこの種のものを売り込むにはいろいろと頭を痛めねばならぬ。

Subject Books 教科図書などと呼ばれている文学以外の図書、すなわち、経済学、地理学、歴史学、化学、物理学、農学、植物学、社会学等の図書は今から十年前までは無きに等しかったが、今日では州立サーヒトヤ・アカデミー⁸²の後援のもとで学部以上のレベルのものが相当数出版されている。その中で新しく書かれたものは少ないが、ヒンディー語では限られたものしか手に入らないという非難を免れしめるには十分なほどになってきている。

宗教や哲学、精神生活に関するものではラーマヤナを凌ぐものにバガヴァッド・ギーター⁸³がある。ヴェーダーンタ哲学やバクティ道⁸⁴に関する伝統的な作品がそれに次ぐ。この分野の問題を扱った近代の著作者の中ではこれまでヴィヴェーカーナンダ⁸⁵やスワミー・ラームティールト⁸⁶の名が高かったが、現在はアーチャーリヤ・ラジニーシュ⁸⁷の著作が大変な勢いを保っている。それらは今や売上げの面で大衆小説と競い合うまでになっている。つまりポケット・ブックで2万5千～3万部、単行本で2～3千部の売行きである。単行本で30～40ルピーもするものでもラジニーシュの信者達は競って買い求めるのである。

芸術性の高い文学、大衆文学及び民間伝承文学の年間売上げに関連して上に数字をあげてきたが、これについてはつきりさせておかねばならぬことがある。すなわち純文学の著作の購読部数は向う数年の内に25～30%減少する。その中には時間の隔たりの影響がはつきり現われるものも出てくるが、大衆小説のものはこれから先数年の内に半分から四分の一に徐々に減って行き、ついには無きに等しくなる。民間伝承文学に入れられるものの売上げには何ら時代の影響は見られない。

上に述べた三通りの読者層の読書態度、言いかえれば書物に対する心の持ち方を調べてみると民間伝承文学の愛読者は書物を尊崇の対象と考えていることがわかる。『アールハー』はただ黙読するだけのものではなく読唱すべきものであり、読唱後は大切に包み切れにしまっておくべきものなのだ。大衆小説の読者は読んで楽しんだ後は書物をまるで使い捨てにする木の葉の器のように考えている。また演壇に立ってヒンディー語図書普及度の低さを憂慮する文学愛好家や作家は、書物は購入するものではなく、むしろ贈物として頂戴するものだと思っている。従ってヒンディー語図書の普及に関する問題で検討の対象になる「図書」とはいつも高級な読者のお気に召すものと決まっているわけである。

(1976年 7月)

(註) 米印は訳註、他は原註。

1米 “Akbar - Birbal Vinod” ムガル朝のアクバル王とその廷臣で詩人のビールバルとの対話形式をとる頓智話集。ビールバルが頓智でアクバル王をやりこめる話と考えればよい。

2 $\bar{A}lha$ 12世紀北インドに現われたとされる英雄。アールハーとウーダルは兄弟でアールハーが兄である。この二人の武勇伝は最初パート（吟遊詩人）のジャグニクによって語られたが、これを基にして北部及び東部インドの多くの詩人たちがそれぞれ各地の方言で二人の活躍を極端なほど勇壮な調子で独特の韻律でうたいあげてきた。その韻律は後になってアールハー調の名で呼ばれるようになった。アールハーとウーダルは自らは王家の出ではなかったが二人を味方につけた王は有利になるのであった。当時の小さな王国間の戦いの原因も甚だ奇異なことばかりであった。例えばある祭礼でまず始めに沐浴する権限はある家系のものなのにだれが先に沐浴したとか。このようにして彼等の敵対心は代々受け継がれていった。アールハーに関しては全部で52度の戦いが描かれている。ジャグニクの著した原本は今日手に入らないが、彼が生み出した人物アールハーはヒンディー語圏の農村では到るところで崇められている。農村では灌漑の仕事から解放される雨季に農民が一座を組んで歌う。この物語は史実性に乏しく虚構性に富むものである。

3 $\bar{S}aranga$ という美女と $\bar{S}adavrija$ という名の若者の恋物語に基づいた民間伝承の詩。

4 “ $\bar{T}ota - \bar{M}aina$ ” の中では女性に対する男性の不貞を扱った話が雌のマイナー（九官鳥）の口から語られ、男性に対する女性の不貞を扱った話がトーター（雄の鸚鵡）の口から語られる。原作はウルドゥー語で書かれているが百年程前にランギー・ラールがヒンディー語に翻訳している。

5 $\bar{N}anadi \bar{B}haujaiya$ 東部の女性の間で歌われている愛別の歌。

6 美女 $\bar{S}orathi$ と若者 $\bar{B}rajabar$ の恋を歌った詩。

7米 “ $\bar{S}inhasan \bar{B}attisi$ ”（獅子座32話集）（1801年）ヒンディー散文の発達に重要な役割を果たしたアーグラ出身の $\bar{L}allulal$ の筆になる説話集。サンスクリットの “ $\bar{S}irha - \bar{s}anadvatriṁshika$ ” の散文による翻案であるが、今日、これは多数の出版社から発行されている。

8米 $\bar{A}khil \bar{B}hartiya \bar{H}indi \bar{P}rakashan \bar{S}angh$ （全インドヒンディー出版社連盟）のプーナ大会 毎年一回インド全国の出版業者が会合をもち、出版事業の諸問題に関して意見の交換、及び出版物の展示を行なう。

9 マハーラーシュトラ州のプーナ市の出版社主。

10米（ヒンディー映画）インド人の娯楽の筆頭にあげられるのが映画鑑賞である。ヒンディーを含むインドの年間映画製作本数は、アメリカに次いで世界第2位である。座席は全部指定制で、通常一日4回一本立ての上映である。またヒンディー（ヒンドスターニー）流行歌はすべてスクリーンで歌われたものである。

11米 $\bar{V}ishva \bar{H}indi \bar{S}ammelan$ 1975年1月10日～14日迄の5日間、マハーラーシュトラ州のナーグプル市にて開催、世界各国から代表（ヒンディー語・文学研究者）及び国内の作家、ジャーナリスト、思想家、ヒンディー普及推進活動家らが一堂に会した史上初のヒンディー語の国際大会。ヒンディー語の現状、育成、将来の展望及びヒンディー語の国際性に関して活発な意見の交換が行なわれた。また、ヒンディー語普及に一役かっている書籍、タイプライター等の展示物の会場も同時に設けられた。

12米 $\bar{R}amayana$ マハーバラタと並ぶサンスクリット語の大叙事詩に基づきながらもラーマ信仰

の立場から神格化されたラーマの行蹟をアワディー語で歌いあげたトゥルシーダース Tulsidas (1532-1623) の叙事詩 “Rāmcarit Manas”。

13米 Hanuman Calisa (猿将士ハヌマーン40頌) Tulsidas の作と伝えられる詩集であるが彼のものとは確認されていない。

14米 ボージプリー語の民謡。ボージプリー語はビハール州の西部からU.P. (北都州) 東部にかけ話される言語。フィジー、モーリシャス、ガイアナ (旧英領ギアナ)、スリーナム等の国々のインド系住民は、ビハール州西部からU.P.東部のボージプリー語やアワディー (Awadhī) 語地域の出身者やその子孫が多い。

15 Nautankī 農民の間に伝わる芝居の一種。信仰、恋愛、武勇を扱うこの劇は農村において今日でも晴天の続く季節に屋外で演じられている。高い舞台に幕を引き、アマキプロの役者がノータンキー劇を演じる。大きな声で語られる台詞はマイクの助けを借りずして数千人の聴衆に聞こえる。楽器は主にドールヤナガーラー等の太鼓である。台詞は散文体は少なく韻文体が多い。名の通った劇団によるノータンキー劇となると20マイルもの道をはるばる歩いて見物にやってくる人もいる。女役も男性が女性に扮してやる。映画の普及に伴って今日ノータンキー劇はすたれる一方である。

16 宗教界の用語や一般民衆のことばで、「ワールティク (Vartik)」とは散文と同義に使われる。^{ガディヤ}

17米 “Hir-Rajha” バンジャープの大地を背景にヒールとラーンジャーとの愛を切々とうたいあげバンジャープの人々の生活に潤いと安らぎを与えてきた悲恋物語歌謡に題材をとったもの。

18米 “Kissa Hatimtai” (Qissa Hatim Tai) 寛仁大度なアラビアの伝説上の王で詩人のハーティムにまつわる物語集。ある王子のために求婚に課せられた7つの難問を苦難の後解決してやり見事結婚させるという伝奇的な物語。Haidar Bakhsh Haidari がベルシア語から翻訳し、Fort William College から1802年に刊行された “Ara'ish Mahafil” に基づく。今日、デーヴァナガリーで刊行されているものはその抄で、言葉もかなり改められている。

19 Rāmaśhalakā Prashnawālī Horoscopeつまり誕生時の星位図を使わないで未来を予見する幾多の方法が占いの本に出ているが、「プラシュナ (Prashna)」はその中の一つである。「ラームシャラーカー・プラシュナーワリー」はそれを基本にして書かれたものであり、トゥルシーダースが書いたという説もある。この占いを信ずる人は自己の運勢に関する疑問の回答をこの表から得ることが出来る。これはたてよこ各15マス目にデーヴァナーガリー文字で書かれた1音節ないし2音節の文字表である。任意のマス目を細い棒でおさえ、次にそれから数えて9マス目の文字を書き出す。さらに9マス目ごとの文字を書き出し、最初棒でおさえたとこまで戻る。書き出した文字は四行詩の二行を成す。それがその人の運勢に関する回答である。マス目のどこから始めても九種の回答のいずれかになっている。

20 トゥルシーダースの『ラーマヤナ』(ラーマチャリト・マナーサ=ラーマ行状記)の原本はなく、後世の詩人達によって付加された物語をさす。第8章は全部後世の付加である。アヒラー

ヴァナの殺害、スロチャナーの殉死等の話はヴァールミーキのサンスクリット語の『ラーマヤナ』やその他の『ラーマヤナ』にはあるが、トゥルシーダースの『ラーマヤナ』には本来ないので後世に付加されたものである。

21米 Nagari Pracarini Sabha (ナーガリー文字普及協会) ヒンディー語の公的使用の地位向上のため1893年ベナレスに設立された。ヒンディー語の普及、ヒンディー文献の蒐集、文学活動、出版活動、研究活動などの振興に大きな足跡を残してきている。今日もこの協会からヒンディー語辞典、文法書を始め数多くのヒンディー語による学術図書が刊行されている。

22米 Hindustani Academy 1927年にアラーハーバードに設立。文学書・学術書の刊行や図書館の運営などの活動をしている。

23米 Devakinandan Khatri (1861-1913) 前世紀末から今世紀初頭にかけて活躍した有名なヒンディー小説家。冒険・怪奇な傾向の作品を著わす。“Candrakanta”, “Candrakanta Santati” “Bhutnath” などの作品がある。

24米 “Candrakanta” (1891年) Naugarh 藩王国の王子ヴィーレンドラ・シンと Vijayagarh 藩王国の王女 Candrakanta との恋物語が数々の権謀術策により流血をみずして両藩王国間に和解を生む過程の中で見事に語られている。

25米 “Jayadratha Vadha” マイティリーシャラン・グプタ (Maithilisharan Gupta) の著作になる詩集 (1910年)、サンスクリット大叙事詩「マハーバラタ」に題材をとったものでアルジュナ王子が出陣中、クリシュナの命令により矢を放ちジャヤドラタを殺害し命拾いするという古代の物語に流麗なカーボリー語 (ヒンディー) で新しい生命を吹込んだ作品。

26米 “Kuruksetra” (1946年) 民族主義者、詩人ディンカル (Dinkar) (1908-1974) の代表作。大叙事詩「マハーバラタ」に題材を求め反戦を訴えた詩集。

27米 “Gaban” (私消の金) (1930年) プレームチャンドの代表作の一つ。中産階級の都市生活者の家庭内の問題をテーマにした中篇小説。

28米 “Kamayani” (1935年) プラサードの代表作。原人マヌ (人間の祖先) を主人公とする叙事詩集。

29米 “Citrakanta” (1934年) バグワティーチャラン・ヴァルマーの初期の代表作の一つ。舞姫チトウラレーカーを主人公とする小説。映画化されたこともある。

30米 “Gunahon Ka Devata” (1949年) ヒンディー語の総合週刊誌「ダルマ・ユグ」の現在の編集長である Dharmvir Bharati (1926-) の作品。Gandar と Sudha のプラトニックな恋を感傷的な筆致で描き上げた長篇小説。映画化された。

32米 “Tyag Patr” (1937年) ジャイネンドラ・クマールの初期の作品。我々の人生は謎に包まれている。主人公 Mrinal の人生もまたしかり。

31米 “Nadi Ke Dvip” (1951年) アッキエーエの二作目の小説。結婚問題、愛、セックスを主題にしており、D. H. ローレンスの「チャタレー夫人の恋人」の影響を強く受けていると思われる作品である。

33 アールハー (Ālha)に関する52の合戦の中で最も緊迫感を覚える叙述がこの巻に見られる。インダルという娘がある王に誘拐されたことがこの戦いの発端となっている。

34 Gulshan Nandā インドで最も人気のある小説家。純文学の中には全く数えられないが小説は最高50万部の記録をうちたてている。彼の小説は芸術的に熟していないが筋の展開が読む人の心をひきつけて離さない。文学の深遠な域に到達し得ない一般民衆はナンダーの小説を待ち望んでいる。元々ウルドゥーの作家であるが先ずヒンディー版が出てそれからウルドゥー版ということになる。従って一般民衆は彼をヒンディーの作家だと思っている。十指に余る小説が映画化されておりその中で『ダーグ』、『カージャル』、『ナー・ザマーナー』はかなり当たった。

35 (Rājvansh), (Samir), (Lokdarshī), (Ranū) この四人はグルシャン・ナンダーの系統をひく一般大衆に人気のある小説家である。本名は一般の人々には分からない。彼らの小説は言葉よりも筋の展開に重きが置かれている。

36 Om Prakāsh Sharma 代表的な推理作家。スリラー作家の一人。他の作家のスリラーが英語のそれを種にしているのに対し彼の小説の舞台はインドである。社会小説もいくつか書いているのだが推理作家としてのほうが知られている。

37 Shivani 女流作家でその小説はウルドゥー文学の中に入るものと見なされている。

38 Gurudatt インド文化を小説に盛り込んだ功績はグルダットにある。作品には50篇以上の小説、10篇の随筆集がある。ヒントゥー教至上主義者達の間では秀れた小説家とされるが、左翼系の人たちは文学者のうちに数えていない。

39 米 Catursen shāstri (1891-1960) 極めて多作であり50篇余りの小説、4百篇以上にものぼる短篇を残している。

40 Vimal Mitra 民衆の間でもまた純文学の領域でも等しく人気のあるベンガル語の小説家。

41 米 Bhagwati-carāṇ Varmā (1903-), Agyey (1911-), Jainendra Kumār (1903-), Yashpal (1903-), Ilācandra Joshī (1902-), Upendranāth Ashk (1910-) 現代ヒンディー文学界を代表する作家(旧世代の作家グループに入る)

42 米 Premeand (1880-1936) ヒンディー語の現代小説はプレームチャンドによって幕あけを告げ、彼の最高傑作“Godān” (牛供養)は画期的な作品となった。

43 米 Sharat Candra Gaṭṭopadhya (1876-1938) ベンガリー語の作家。社会で磨げられた人々の姿を愛情をもってヴィヴィッドに描き読者の共感を得た。彼の作品はすべてヒンディー語に訳され、ある出版社のポケット・ブックスではオリジナルのヒンディー小説家を凌ぐ作品数を出版している。

44 米 Krishan Gandar (1914-) ウルドゥー語の代表的な小説家。短篇は2百以上のほり、ヒンディー語訳も単行本、ポケット・ブックで出ている。

45 米 Amrita Pritam (1919-) パンジャービー語の女流詩人、小説家。彼女の小説もすべてヒンディー語訳が出版されている。

46米 Nirmal Varma (1929-), Kamleshvar (1928-), Rajendra Yadav (1929-); Mohan Rakesh (1925-1973) 現代ヒンディー文学界を代表する作家(新世代の作家のグループに入る)

47米 Amritlāl Nāgar (1916-) ヒンディーの小説家。地方を舞台にした社会小説を書いている。

48米 Rāmlīlā 既出『ラーマヤナ』に基づきラーマの生涯を芝居にしたもの。ダシラー祭の際など秋にヒンディー語圏で地域社会の行事として素人たちによって演じられる。また商業劇団によって演じられることもある。

49 Yashwant Sinh Varma いわゆる文芸的な劇作家の中には数えられない。しかしノータンキー劇と近代演劇の間を行くものとしてその戯曲は今日も売れている。読まれるばかりで舞台化されることはない。故人。

50米 Kumānī 中部パハリー語に属する地方語。北部州の北部すなわち、アルモラー、ナイニータールなどネパール西端に接するヒマラヤ山丘地方で話される。

51米 Garhwālī 中部パハリー語に属する地方語。クマオニー語地域の西部で話される。

52米 Awadhī 東部ヒンディー語に属する地方語。ラクナウ、カンブール、アラハバードなどを含む地域で話される。

53 Bhikhārī Thākur ボージプリー地域で最も人気のあったノータンキー劇団の主宰者。演出家であったが数年前亡くなった。

54 Shrikrishna Pahālwan カンブール周辺の農村の住民の間で評判のあったノータンキー劇を主宰し、自作のノータンキーの脚本の出版者でもあった。

55 Natthā Rām Sharma Gauṛ カンブールより西方にあるアグラ、ハートラス方面で名高いノータンキー劇団の主宰者であった。

56米 Braj Bhāshā 西部ヒンディー語に属する地方語。アグラ、マトゥラーを中心とする地方で話される。

57 Candrabhāṭ, Balwant 両者はメーラット周辺のノータンキー劇の主宰者。

58 Lakṣmicand, Mānge 二人とも故人。ハリヤーナー地方ではノータンキー劇の作者として今日なお記憶されている。

59 ノータンキー劇で歌われる歌謡をこの地のことばでラーガニー (Rāgānī) と呼んでいる。

60 ベナーレス以東のウツタル。プラデーシュ及びビハールのボジプリー語地域をさす。

61 “ Patibhakti ”, “ Muḥabbat Kī Patlī ” シュリー。クリシュナ。パハルワーン作の有名なノータンキー劇。

62 “ Amar Sinh Rāthaur ”, “ Indarharan ” ナッターラム。シャルマー。ガウル作の有名なノータンキー劇。

63米 Parsi Theatrical Company 18世紀末よりボンベイを中心に西洋演劇の影響下にインド人による演劇活動が興りつつあったが、19世紀半ば頃よりパールシー(拝火教徒)による商

業劇団が誕生するようになった。これらは北インドヒンディー語地域にまで進出し、主にウルドゥー語を用いて通俗的な芝居を演じた。またこれらはヒンディー語による同種の演劇を生み出した。

64 Radheshyam Bareli 近代の舞台演劇と伝統的な演劇との中間をいく演劇法として今から半世紀前パールシー劇団が大掛かりな劇を舞台化した。その時初めて女の役は女性が演じた。これはトーキーが普及する以前都会で非常に人気を博した。Bareli 市出身の講師ラーデシヤームが著した戯曲がそれらによって舞台化されたのであった。Agahashr Kashmiri, Dil Lakhnavi 等数多くの劇作家の協力も得ていた。

65 “Vir Abhimanyu”, “Shravanakumar”, “Krishna Avatar” ラーデシヤームの作になる有名な戯曲。

66 Ramesh Mehta は現代の問題をテーマに戯曲を書き自らも演じているが、純文学の中には数えられない。デリーで上演された劇はかなり人気を博した。パールシー劇団のものよりも水準の高いものであるが文学的な舞台芸術のレベルのものより多少劣る。

67 Jagdish sharma 現代舞台演劇とノータンキー劇の中間をいく劇作家。

68 Giranjit, Revatisaran Sharma, Gyandev Agnihotri 三人とも放送作家。ステージでも彼らの作品が上演されることがある。

69 米 Jayashankar Prasad (1890-1938) チャーヤーワードの代表的な詩人の一人。また歴史上の人物を主人公にした多くの史劇を書いている。前述の “Kamayani” 及び “Skandgupta” “Candragupta” はデリー大学をはじめ諸大学のヒンディー文学科の教科書に指定されている。

70 米 Ja-dish Candra Mathur (1917-) ヒンディー語の劇作家。All India Radio (インド国営放送) に勤務、演出家。サンギート・ナータク・アカデミー (音楽舞踊アカデミー) 会員。特に一幕劇、放送劇を手がけている。

71 米 Vishnu Prabhakar (1912-) ヒンディー語の劇作家、小説家。数多く的一幕劇短篇小説を書いている。

72 ここでいう実験主義派 (Prayogdharmi) は財政的な困難にもめげずに演劇の分野で新しい実験を試みる意欲に燃えているいくつかの劇団。

73 Tendulkar マラティー語の有名な劇作家・演出家。その作品はヒンディー語に翻訳・出版され上演されている。“Khamosh Adalat Jari hai” は随分評判になった。伝統的な様式を脱して上演されたものは教育ある人達に評判がよかった。

74 米 Baccan (1907-) ヒンディー語の詩人。

75 正確には Bal Kavi Bairagi 民族主義的な詩を朗唱し詩会で名をあげたが、現在別の分野に進出。

76 Gopal Prasad Vyas 諸ぎゃくの詩人でデリー地区のヒンディー文学協議会の役員である。

77 Kaka Hathrasi 諸ぎゃく詩人として最も人気がある。これまでに10冊の詩集が刊行され詩会でも名声を博してきている。しかし純文学ではものの数に入れられない。

78米 Nagendra 博士 (1915-) 現在デリー大学ヒンディー文学科教授, 評論家。10
数冊の評論集を出版。"Vicār aur Anubhūti" "Kāvyaśāstr kī Bhūmika" などの著作がある。

79米 Hazārī Prasad Dwivedī (1907-) 元サーヒトヤ・アカデミー会員。元全インド
ヒンディー文学協会会長。彼の著作分野は随筆, 評論, 小説, 宗教, 歴史など多方面にわたって
おり20余りの著作がある。代表作に "Bānabhaṭṭa kī Ātmakathā" (バーナバッタの自伝),
"Hindī Sāhitya kī Bhūmika" (ヒンディー文学序説) — 文学史, "Ashok ke Phūl" (無憂華)
— 随筆集があげられる。なお評論集 "Ashok - Parv" にて1974年度サーヒトヤ・アカデミ
ー文学賞受賞。

80米 Ramcandra Shukl (1884-1940) ヒンディー文学史家として画期的な業績をあ
げた。また随筆, 評論の分野でも数多くの作品がある。

81 一般に随筆は退屈な文学ジャンルと考えられているので ラリット・ニバンド (Lalit
Nibandh) と名付けて内容は真面目なものであつても興をそそる随筆でもあるような感じを
読者に抱かせるという仕かけである。

82 ヒンディー語で大学程度の書物が刊行されていなかった分野について著述。刊行の推進の
ためにインド政府はヒンディー語圏のすべての州に対して巨額の資金を調達した。その資金で設
立された各州の出版振興組織がここでいう Sāhitya Akademi である。

83米 "Bhagavad Gīta" 古代インドのサンスクリット大叙事詩「マハーバラタ」(全18巻)
の6巻に折りこまれた挿話であるが独立した形で「ウパニシャッド」, 「ブラフマ・スートラ」と
並ぶ宗教書としてまたヒンドゥー教徒の座右の書—聖典として友人のクリシュナから教えを乞う問
答の対話形式をとる7百余りの詩篇で構成されている。 今日でもおなじみで読まれている。

84米 Bhakti とはヒンドゥー教において信愛とか帰依とか訳される言葉であるが, 熱烈な信仰
心を神に捧げ恩ちょうにあずかることにより解脱が得られるとする。

85米 Vivekananda (1863-1902) カルカッタ出身の思想家。宗教家。世界の宗教
は一つと説く師のラーマクリシュナの教えを受継いで宗教団体ラーマクリシュナ・ミッシ
ョンを設立。現在この団体はインド国内, 海外に多くの支部を持ち宗教活動とともに慈善事
業を行なっている。

86米 Swami Ramtirth (1873-1906) 本名 Ramtirth, バンジャール出身。大学で数学
を専攻するが早くからインド及び西洋の哲学書に親しむ。1900年に出家。アメリカに2年滞
在し, 1904年帰国。スワミー・ヴィヴェーカーナンダの影響も受ける。社会改革, 民族運
動に影響を及ぼした。

87 Acārya Rajanish 現代インドの独創的な思想家である。政治や宗教, あるいは現代の諸
科学などあらゆる問題をテーマに講演を行なっている。50冊以上の講演集がある。プー
ナにアーシュラム (道場) があり, 新しい遁世の道を教えている。いくつかの都市で信
奉者達が修練キャンプを設けてやさしいヨーガの教えを手引きしている。昨今,
Bhagwan Shri Rajnish の名で親しまれている。 (糟谷博子訳) 筆者紹介 → P. 60

(P. 12 の続き)

筆者紹介

Dayanand Varma 1930年ムルターン(現パキスタン領)に生まれる。家は代々、同市で書店を経営。1947年インド・パキスタン分離に伴いデリーに移る。デリーに移住後も家業に従う。読書は物語・推理小説から始まったが、心理学・哲学書に親しむようになる。1955年頃よりものを書き始める。1962年に最初の随筆集を出す。現在、書店・出版社 Punjabi Pustak Bhandar, Star Publications などの経営のかたわら、月刊誌“Prakashit Man”の編集発行人。全インド ヒンディー出版協会の副会長。著作は小説“Zindabad Murdabad”, 随筆“Pushcim ke Tin Rang”, “Ham Sab aur Wah”, “Manasik Saphalta”のほか性心理学関係の“Yaun Vyavahar Anushilan”がある。